

日本学術会議だより

№.20

公開講演会成功裡に開催さる

平成 3 年 2 月 日本学術会議広報委員会

日本学術会議は、例年どおり、平成 2 年度においても、主催の公開講演会を 3 回開催しました。今回の日本学術会議だよりでは、その講演会に加えて、本会議の国際的活動や最近公表された「委員会報告」などについてお知らせします。

平成 2 年度日本学術会議主催公開講演会

本会議は、本会議の会員が、学術の成果について広く市民と語り合う機会として、時宜にかなったテーマを選定して、毎年、公開講演会を開催している。本年度は、次の 3 回の講演会を開催したが、いずれも成功裡に終了した。

I 公開講演会「高度技術と市民生活」

標記講演会は、去る平成 2 年 10 月 13 日（土）13 時 30 分～17 時に、兵庫県加東郡社町の社町福祉センターホールで、約 250 人の聴講者を得て開催された。各演題と講師は、①「高齢化社会と高度技術」原沢道美（第 7 部会員、東京通信病院院長）、②「消費生活と高度技術」正田彬（第 2 部会員、上智大学教授）、③「地域振興と人間主導型高度技術」竹内啓（第 3 部会員、東京大学教授）であった。

II 公開講演会「資源エネルギーと地球環境に関する展望」

標記講演会は、去る平成 2 年 10 月 30 日（火）13 時～17 時に、本会議講堂で、約 330 人の聴講者を得て開催された。各演題と講師は、①「人間と環境」大島康行（第 4 部会員、早稲田大学教授）、②「エネルギーと環境」石井吉徳（第 5 部会員、東京大学教授）、③「エネルギーと経済問題」則武保夫（第 3 部会員、立正大学教授）、④「エネルギーと CO₂ 対策」上之園親佐（第 5 部会員、摂南大学教授）であった。

III 公開講演会「人間は 21 世紀を生きられるか」

標記講演会は、去る平成 3 年 2 月 19 日（火）13 時 30 分～17 時に、本会議講堂で約 200 人の聴講者を得て開催された。各演題と講師は、①「科学・技術・政策」杉本大一郎（第 4 部会員、東京大学教授）、②「科学と人間—生存のための条件づくり」下山瑛二（第 2 部会員、大東文化大学教授）、③「人間の適応能力とリスク」土屋健三郎（第 7 部会員、産業医科大学学長）であった。

いずれの講演会も、時期にあった、関心の呼ぶ企画であったため、外くの聴講者が来場する盛会となり、また、各講師の講演後の質疑応答では、聴講者から活発な質問や意見の開陳がなされ、まさに市民との対話の感があり、極めて有意義であった。

なお、これらの講演会については、後日、「日学双書」として、（財）日本学術協力財団から出版される予定である。

平成 2 年度二国間学術交流事業

本会議では、二国間学術交流事業として、毎年 2 つの代表団を外国に派遣し、各訪問国の科学者等と学術上の諸問題について意見交換を行って、相互理解の促進を図る事業を行っている。

この事業は、昭和 58 年度から実施されており、これまで、アメリカ、マレーシア、西ドイツ、インドネシア、スウェーデン、タイ、フランス、大韓民国、連合王国、シンガポール、チェコスロヴァキア、ポーランド、カナダ、イタリア、スイス及びインドの 16 か国に代表団を派遣してきた。

平成 2 年度には、① 9 月 11 日から 22 日まで、中華人民共和国へ、渡辺格副会長以下 4 名の会員等から成る代表団を、② 9 月 17 日から 27 日まで、オーストラリア及びニュー・ジーランドへ、大石泰彦副会長以下 5 名の会員等から成る代表団をそれぞれ派遣した。

中華人民共和国派遣代表団は、中国科学院、中国社会科学院、中国医学科学院、北京大学、西安交通大学、復旦大学など約 20 機関を訪問し、中華人民共和国の学術や今後の交流の推進策などについて会談、意見交換を行った。中華人民共和国側からは、すでに、日本の多くの大学、研究機関と交流を行っているが、さらに交流を拡大したいとの期待が表明され、両国間の今後のより積極的な交流・協力をめぐる活発な意見の交換が行われた。

オーストラリア及びニュー・ジーランド派遣代表団は、オーストラリアでは、オーストラリア科学アカデミー、オーストラリア国立大学、シドニー大学、連邦科学・産業研究機構など、ニュー・ジーランドでは、ニュー・ジーランド王立協会、マッセイ大学、ヴィクトリア大学、科学技術研究機構など、両国合わせて 20 を越える諸機関を訪問し、それぞれの国の学術、今後の交流の可能性などについて、会談、意見交換を行った。特に、両国では近年、国家、国民に実際に役立つ技術の発展を目指した科学技術の大きな改革が進められており、これらの問題等について、熱心に意見の交換が行われた。

今回の成果は、代表団派遣時だけのものではなく、今後のわが国の学術の国際交流・協力の進展に大きく役立つものと期待される。

平成 3 年(1991年)度共同主催国際会議

本会議は、国際的な活活の一環として、毎年、日本で開催される学術関係国際会議を関係学術研究団体と共同主催してきている。平成 3 年(1991年)度には、次の 6 件の国際会議を開催する。

■第21回国際農業経済学会議

開催期間 平成 3 年 8 月 22 日～29 日
開催場所 京王プラザホテル(東京都新宿区)
参加者数 国外 550 人、国内 950 人、計 1,500 人
共催団体 日本農業経済学会外 4 学会

■国際医用物理・生体工学会議(第16回国際医用生体工学会議・第 9 回国際医学物理学会議)

開催期間 平成 3 年 7 月 7 日～12 日
開催場所 国立京都国際会館(京都市)
参加者数 国外 1,000 人、国内 1,500 人、計 2,500 人
共催団体 (社)日本エム・イー学会、日本医学物理学会

■国際純正・応用化学連合1991国際分析科学会議

開催期間 平成 3 年 8 月 25 日～31 日
開催場所 日本コンベンションセンター(千葉市)
参加者数 国外 500 人、国内 1,000 人、計 1,500 人
共催団体 (社)日本分析化学会

■第22回国際シミュレーション&ゲーミング学会総会

開催期間 平成 3 年 7 月 15 日～19 日
開催場所 立命館大学、国立京都国際会館(京都市)
参加者数 国外 170 人、国内 300 人、計 470 人
共催団体 日本シミュレーション&ゲーミング学会

■一般相対論に関する第 6 回マーセルグロスマン会議

開催期間 平成 3 年 6 月 23 日～29 日
開催場所 国立京都国際会館(京都市)
参加者数 国外 380 人、国内 170 人、計 550 人
共催団体 (社)日本物理学会

■第22回国際動物行動学会議

開催期間 平成 3 年 8 月 22 日～29 日
開催場所 大谷大学(京都市)
参加者数 国外 400 人、国内 400 人、計 800 人
共催団体 日本動物行動学会

経営学研究連絡委員会報告—経営学教育改善のために—(要旨)

(平成 2 年 11 月 26 日 第 763 回運営審議会承認)

企業環境の激変、就中技術革新、高度情報化、国際化等々の急進展に伴って、経営学教育は、大きく見直され、かつ新たな体系化と一層の内容の充実の必要性に迫られている。すなわち、学術的分野の広がり、国際化や情報化の急進展は、経営学の外延的拡大を要請し、また経営管理の高度化、複雑化および戦略的視点の重要性増加は、斯学の多面的な内容の充実強化を要求している。本報告は、かかる状況下において経営学教育の現状分析を行い、かつ(1)教育体系(とくにカリキュラム)の再編成と(2)教育方式の新たな在り方を探り、もって経営学に対する社会的ニーズへの即応と経営学教育の総合的な体系化への試みを展開したものである。とくに教育する側、される側両面での人材育成を強く念頭に置いて経営学教育改善の方途を示すとともに、大学院教育へのつながりを意識しながら将来への展望を示唆しようとしたものである。

統計学研究連絡委員会報告—統計学研究教育体制の整備のための具体的方策について(要旨)

(平成 2 年 12 月 21 日 第 764 回運営審議会承認)

現今、高度情報化の進展による情報資源の多激な蓄積にともない、統計的情報処理を適切に行える人材に対する社会的需要が著しく高まっている。現在米国では 60 を超える大学に統計学科が存在するのに対し、我が国では統計学関連の大学院専攻はただ一つあるのみである。最近の学術研究における、調査、実験、観測等の活動の急速な増大を考慮するとき、データ有効利用の学としての統計学の研究教育体制の不備は、我が国の学術研究の将来に対し、国際的に見て著しく不利な状況を生み出しつつある。

本報告では、統計学を一つの専門分野として狭く捉える従来の考え方を避け、本来学際的な性格を持つ統計学研究の実態に即して、諸科学との関連をより重視する統計科学の概念を確立し、広範な関連分野の研究者の協力により統計科学研究所あるいは専攻等を設立することの推進を提案する。この提案を具体化することにより、国際的に見ても先進的な統計学研究教育体制を実現することが可能になるものと期待される。

実験動物研究連絡委員会報告—動物実験を支援する人材育成について—(要旨)

(平成 2 年 12 月 21 日 第 764 回運営審議会承認)

医学、生物学領域において、動物を用いた実験研究が先導的な形で寄与し、社会に貢献してきたことの意義は大きい。遺伝子・分子・細胞の各レベルにおける研究成果を総合して個体の生物機能・生理現象を理解し、病的現象に適切な対応を計るために、個体レベルの研究、すなわち、動物実験による研究の必要性はますます増加し、多種類かつ高品質の動物が精細な計画・技術のもとで実験に供されるようになった。以上の観点から動物実験を取り囲む現状を詳しく検討した結果、動物実験の高度化・多様化に対応できる、専門的知識と技術を習得した技術者の数が著しく不足していることを強く認識するに至った。

本報告は、このような現状に対する改善の方向を明らかにするとともに、バイオサイエンス研究支援体制を一層整備するための方策として、特に動物実験技術者の教育機関の設立を中心に、技術の審査・認定制度の確立、技術者の採用制度の検討、身分・処遇保障等についての将来展望を示唆するものである。

日学双書の刊行案内

日本学術会議主催公開講演会の記録をもとに編集された次の日学双書が刊行されました。

・日学双書 No.10 「くらしと学問の近未来」

〔定価〕 1,000 円(消費税込み、送料 210 円)

※問い合わせ先:

(財)日本学術協力財団(〒106 東京都港区西麻布 3-24-2、交通安全教育センタービル内、TEL 03-3403-9788)

御意見・お問い合わせ等がありましたら、下記までお寄せください。

〒106 東京都港区六本木 7-22-34

日本学術会議広報委員会 電話 03(3403)6291